

『TOO HOT』

著作 a s h

この作品は『To Heart』（リーフ・ビジュアルノベルシリーズVOL.3）を元としています。

0.Prologue

こらえようとしても、腹の底から湧き出る笑いを止める事は出来ないな。
端から見れば、変にさえ思えるかも知れない。

だが、そんな事はどうだっていい。周りがなんと思っても、構わないさ。

どうしようもないくらいに俺ははしやぎ回っていた。今なら誰に会っても、明るく「やあ！」と声を掛けてしまいたいような気がする。

だって、俺の傍らにあのマルチがいるんだから。

『TOO HOT』

1. Breakfast

「浩之さ〜ん…」

俺がリビングに入ると、突然マルチが半泣きの顔でやって来た。

マルチのセットに入っていた服の上に、エプロンを着けている。そう言えはいつまでも標準仕様の服じゃつまらないから、早いところマルチの服を買ってやらないと行けないな。

「…すみません、またやってしまいました…」

「また?」

俺がマルチに聞き返すと、マルチは少し鼻声になりながら、

「ばい〜」

と泣きながら答える。う〜ん、一体何があったんだ?

「マルチ、一体どうしたんだ?」

俺はなだめるようにして、マルチの頭にポンと手を置いた。

「あっ……」

すると、マルチはうつむいて静かになった。言うまでもないけど、マルチは

頭を撫でられるのが好きだ。

しばらくそのままじっとしていたものの、マルチがぼつりと喋り出した。

「あの…実は、浩之さんの朝食を作ろうと思って…。台所を見たら、あの時と同じようにこれが見つかった物ですから……」

口籠もるマルチ。

『TOO HOT』

あの時って？ と俺が思った時に、初めて気がついた。

台所からリビングまでを包み込む何やら香ばしい匂いに…。

「マルチ…もしかして？」

「ご、ごめんなさいですっ！ ミートソースとパスタが見つかったので、今度はちゃんと作るうと思ってたんですけど、あの夜の事を思い出して気がついたらこうなってます…」

と言つて、マルチが向けた視線の先には、見事なまでの…。

「…ミートせんべい？」

「すみませんすみませんっ！」

一生懸命謝るマルチを見ながら、俺は何とも言えない気分に見舞われた。もちろん顔は笑っていたし、それが嘘つて言う訳じゃない。ただ、妙に安心したような、そんな気がした。

ここに居るのは、間違いなく俺の知ってるマルチだ、って。

「ははは、そんなに気にする事ないって。マルチが俺のために作ってくれたんだろ？
だったら、きつとうまいって」

「浩之さん…」

「ほら、早く食わせてくれよ、それ。な？」

「はいっ、じゃあすぐ準備しますね」

そうして、俺は久々にマルチの「ミートせんべい」を食ったのだが、気のせいかな、以前よりもうまくなってるような…。

『TOO HOT』

「次はもっとおいしいのを作りますから」

と屈託なく笑うマルチだったけど、俺はその時、それが「ミートせんべい」の事を言ってるのか、パスタの事を言ってるのか、分からなかった…。

まあ、何にせよ、こうして朝からマルチの笑顔を見られるってのは、いいもんだな。

さて、今日は大学どうしようかな…。

天気はいいし、講義は別段受けても受けなくても困らない奴ばかりだし、マルチがいる事だし、今日はマルチとどこかに出掛けるとするか。

よし！今日はマルチとデートだ。マルチの服も買ってやらないといけないしな。

「なあマルチ、今日は天気もいいし、外に出ようぜ」

俺がさっそく切り出すと、マルチはきょとんとしながら答える。

「え？ いいんですか？」

「せっかくマルチが戻って来たんだ。マルチとずっといたいと思ってるね」

「え、そ、そんな…」

ほっと頬を赤く染めるマルチ。へへ、可愛いじゃねーか。

「マルチは嫌なのか？」

「そんな事ありませんっ…あっ」

「じゃあ、決まりだ。それにマルチにもっと似合う服を買ってやりたいしね」

と俺が言うと、マルチはぶんぶん頭を振って、

「いえっ、服なんてこれでいいですよ」

と答えた。まあ、そんな反応もあるだろうとは思ってたけど、やっぱり標準服と言うの

『TOO HOT』

は面白くない。

「俺はマルチにはもっと似合う服があると思ってるんだけどな。それに、それは俺がやりたいからやるんだ」

「でも……」

相変わらず渋っているが、そんな事は大した問題じゃない。どのみちマルチが遠慮するのは分かっていた事だし、それを全部真に受けていたら、この先が思いやられる。

「とにかく、行くの。俺はマルチをもっと……その……可愛いコにしたいって……言うかあ……」

駄目だ、何だかミョーに照れたりして……

でも、マルチには十分通じたみたいだな。

両手を顔に当てて、さっきよりも顔中真っ赤にしてる……って、オイ？

まさかオーバーヒートなんかしないだろうな……

「マルチ？」

「……………」

返事がない。ただの……って、ボケはともかく。

「おい、マルチ？」

再び呼んでも、やっぱり返事がない。まさか？　と、思っただけで俺がマルチの身体に触れようとした時、

「浩之さん……」

と、かすかにマルチが答えたのだった。

『TOO HOT』

「何だ、ちゃんと動いてたのか。てっきりまたオーバーヒートでもしたのかと思ったよ」
だが、俺がそう言いながら、マルチの身体に触れた途端、

「あっ…」

と一声上げたと思ったら、マルチはそのまま動かなくなってしまった。

「おい？ マルチ！」

今度は呼びかけても、身体を揺すっても反応がない。

「…マジでオーバーヒートかよ、マルチ…」

やれやれ、こんな調子では先が思いやられるなあと思えながらも、俺はそんなマルチを愛しく思うのだった。

『TOO HOT』

「本当にいいお天気ですね」

まぶしそうに空を見上げながら、マルチが言う。

マルチのそんなしぐさは、やはり普通の女の子そのものだった。「耳飾り」を外してしまえば、まったく分からないだろうな、これは…。

「浩之さん？　どうかしたんですか？」

ぼんやりとした俺に気づき、マルチが首を傾げてる。うーん、見てて飽きないよな、やっぱり。

「ん？　マルチを見てると飽きないなって思ってたの」

「それはよかったです」

…ちよつと期待した反応とは違ったが、それでも嬉しそうに笑うマルチを見ると、何だか俺も嬉しくなる。

「さて、それじゃ、まずはデパートにでも行くかい？」

マルチの服を買ってやると言ったものの、正直貧乏学生にはブランド物なんて手が出ない。ただでさえ、マルチの代金を親父に借りてる身なのに…。

そんな俺の心中を知ってか知らずか、マルチは本当に嬉しそうに答えた。

「はいっ、わたし初めてなんですよ、デパートって」

「へえ…って、そりゃそうか」

「色んな物が売ってるんですよね？」

『TOO HOT』

端から見ても、マルチが目を輝かせてるのがよく分かる。まるで初めてお出かけする小さな子どものようなようだ。

そうだ。

子どもと言えば、一つ気になっていた事があるんだった。

「ところでさ、マルチ」

「はい、何ですか？」

「マルチの服のサイズってさ、普通の婦人服でいいの？」

「え？」

マルチは返事に困ったのか、一度聞き直した後、うつむいてしまった。

そんなに答えにくい事を聞いたつもりはないんだけどな。もしかしたら、聞き方が悪かったのかな？

「言い換えるよ。服のサイズは分かるか？」

「…えーっと、分かりません」

「計ってくればよかったかな？ ま、どのみち試着すればいい事だし、大した問題じゃないか…」

「すみません…。でも、わたしの身体って、確か十二、三歳の設定だって聞いた覚えがあります」

…それにしてもちよっと小柄だよなあ、マルチは。

「セリオさんは十八歳ぐらいの設定だったんですけど…。わたしは『小柄な方が人に好かれやすい』と言う理由だったと思います」

『TOO HOT』

なるほど…。そりゃ確かにマルチの方が「可愛らしい」って感じあるもんな。

セリオは「美人だけどつつきにくい」って感じだしな。

「俺はマルチの方が可愛らしくて好きだけどね…っと、またオーバーヒートなんかするなよお」

と、俺が言った途端、マルチは立ち止まってしまった。

またか？ と一瞬思ったけど、どうやら違うみたいだった。

「…うーん…：頑張ります」

顔を真っ赤にしながらも、マルチは小さくそう答えた。

どうやら、一生懸命にこらえてるらしい。

朝のパターンもある事だし、ここは何も言わずにじっと見守っていよう。

「……………ん」

マルチはまだ頑張っている。

「……………ふう」

時折大きく息を吐いてる。そう言えば、マルチの冷却システムってどんなのだっけ？

確か汗も出せるようだし、呼吸もしてるしな…。ま、後で聞いてみよう。

マルチが喋り出したのは、それからしばらくしてからだった。

「…お待たせしてすみません。もう大丈夫ですから」

まだ少し顔が赤いような気もしたけど、マルチが大丈夫って言うならそれでいいんだろ
うな。

「無理させて悪かったよ、マルチ」

『TOO HOT』

「いえっ、わたしの方こそ、ご迷惑ばかり掛けてしまっ…」

「さて、それじゃあ…」

恐縮しているマルチをたしなめるように、俺は一旦そこで言葉を切り、優しい笑顔を見せて、続けて言う。

「のんびり行こうぜ」

うん。

我ながら決まったな…。

で、肝心のマルチの反応はというと、

「はいっ」

と、今度は俺の期待通りの笑顔を見せてくれたのだった。

だが、その後はのんびりし過ぎたため、デパートに行くまでの時間がいつもの倍以上かかってしまった…。

そして、俺とマルチがデパートに着くと、そこに待っていたのは、俺たちにとってあまり嬉しくない反応ばかりだった。

考えてみれば、俺とマルチの組み合わせてのは、珍しいのかも知れない。そんな事はすっかり忘れていた。だって、俺にとってマルチはメイドロボじゃなくて、一人の女の子だったから。

だが、世間サマはそうじゃない。

婦人服売り場に行つて、俺が店員に「この子に似合いそうな服を見てくれないか」と言つた時に見せた店員の表情…。

『TOO HOT』

店内を見てた時に、すれ違う人が時々寄せる好奇の視線。

明るく元気に店内を見て回るマルチとは裏腹に、俺は正直なところ参っていた。

そんなに変だろっか？

いや、確かにマルチは他のロボットとは違っている。そのせいで、余計に人目を引いてしまうのもある。

これならいつそ「耳飾り」を外した方が気楽かもな…。でも、それをマルチはどう思うだろうか？

俺が外せって言えば、外すかも知れないけど、マルチが余計な事に気を遣うかも知れないじゃないか…。

それは駄目だ。マルチに余計な心配は掛けられない。だって、俺がマルチの事をちゃんと守ってやらないと、誰が守るって言うんだ？

そうだよ、俺がしっかりしなけりゃいけないんだよ。

そんな決意を新たにし、俺とマルチは買い物物をすませて、デパートを後にした。買い物帰りとくれば、やはり寄り道だな。

そう思って俺は一瞬、ゲーセンに寄ってこうかと考えたけど、今日は荷物もあるし、マルチはあんまり得意じゃないからなあ…。

と言う訳で、近所の公園に寄った。

安直と言えば安直だが、それでもマルチは嬉しそうにしている。

「素敵な場所ですね」

池のまわりの柵に手を掛けながら、マルチが言う。

『TOO HOT』

「まあね。ここは小さい頃からよく遊んだよなあ」

近所の公園と言っても、結構な広さがあって、子どもの頃はこの公園だけで十分遊べたくらいだ。

「可愛いでしょうね」

マルチが微笑む。

「何が？」

俺が聞くと、一層優しそうな笑みで返す。どうしてマルチはこんな風に笑えるんだろう？ もしかしたら下手な奴よりも、人間らしいんじゃないか？

「浩之さんの子どもの頃ですよ」

「はは、そんな事なかったなあ。よくあかりをからかってたしな」

「いいですね…」

「なあに、子どもの頃なんて、あんまりいい思い出ばかりじゃないからな」

俺はその時はっと気がついた。

マルチにはそもそも子ども時代なんてない。懐かしそうに話す俺の姿を見ては、うらやましがらだけしか出来ない。

「でも、いいですよ。そんな風に思い出があるのは素敵な事だと思います」

そう言いながら微笑むマルチの表情が、どこか寂しそうに見えたのは気のせいではないと思った。

「…いいじゃんか」

「はい？」

『TOO HOT』

「マルチはこれからその『素敵な事』ってのを思い出として残せばいいじゃんか。この俺との思い出をね…」

「浩之さん…」

「ちょっとクサかったかな？」

でも、効果はてきめんらしく、マルチはブーツと俺を見つめている。

いい雰囲気ってヤツだね、こりゃ。

「ちょっと恥ずかしいけど、せっかくだしな…」

「マルチ…」

と、俺はマルチの身体をグイッと抱きかかえるようにして、そのまま軽くキスをする…
つもりだった。

「あっ！」

だが、抱きかかえた時に、ふとマルチが身体を動かしたため、俺が持っていた買い物袋がすっと俺の手から抜け落ちて…。

「バシヤ。」

嫌な音と、それを肯定するようなマルチの叫び。

「ああっ！」

「…もはやキスどころじゃない。」

「服が濡れちゃいますっ」

そう言いながら、マルチは柵を越えようとしている。

「おいおい、マルチには無理だよ」

『TOO HOT』

しようがないなあ…。確かこの池の深さは大した事なかったし、とりあえず俺が取ってくるか。

「でもでも、早く取らないと…」

慌ててる様子 of マルチを見て、俺は短く言った。

「女の子に取りに行かせる訳には行かないだろ？」

「え…」

すると、マルチは途端におとなしくなった。うんうん、この初々しさはたまらないよな…っと、そんな事を考えてる場合じゃあないか。

「……しよっと」

軽く柵を乗り越えて、俺が池のふちに腰を下ろした時、

「あゝれ〜」

と、何やら俺の後ろから間抜けな声が出た。

もちろん声の主はマルチだった。そして俺が振り向いたら、そこには何と強引に柵にしがみついて、こっちに向かって倒れてくるマルチの姿があった。

「だから、俺が取りに行くって…」

「でもでも…、あくもう駄目ですう〜」

オイオイ…そりゃないだろう…。

……………、

しばらくして、派手な水音と水柱。

「……………だから言ったらう」

『TOO HOT』

「ああああん、すみませえん」

幸いにして二人とも怪我はなかったが、結局ずぶ濡れになっちゃった。

買ってきた服も、一度洗濯してからじゃないと駄目だな…。

「ごめんなさいごめんなさいいつ」

必死に謝ってるマルチを見て、俺はびしょ濡れになった手をぼんとマルチの頭において、ゆっくりと撫でながら言った。

「俺に任せろって言ったのに、馬鹿だなあ、マルチは。でもどこにも怪我がなくてよかったよ」

「浩之さん……」

池に落ちたままの状態で、俺はマルチの頭をしばらく撫で続けていた。思えば、この時さっさと上がって、家に帰ればよかったのに……。

時折吹く風はまだ冷たさを感じさせて、俺の身体を必要以上に冷やしてくれたのだ……。

「…つくしよい！」

3.Blackout

家に帰ってすぐにやった事。

汚れた服と買ってきた服を、洗濯機に放り込んだ（洗濯機は全自動だから、これはマルチの手を煩わせる必要がない）。しかし、一緒に洗濯して構わないだろうか？ …ま、考えるのはよそう。

シャワーを浴びた（もちろんマルチと一緒に、だ）。

そして、やっと落ち着いたと言う訳だ。

でも…何だろう、気のせいかな寒気がするような…。

ま、そのうち直るだろう。

「浩之さん、大丈夫ですか？」

そんな俺の様子が気になったのか、マルチが心配そうに聞いてくる。

「いや、大した事はないって。マルチの方こそ、大丈夫なのか？」

「はい、わたし身体だけは丈夫に作られていますから」

身体だけって事はないと思うけどな…。ま、それはともかく。

「よかったよ、マルチに何もなくて」

俺はそう言いながら、マルチを抱き寄せる。

心なしか、マルチの身体が冷たく感じた。

「あ、あの浩之さん…」

「何だか気持ちいいから、しばらくこうしててくれないか？」

『TOO HOT』

「は、はい……」

俺はマルチの小さな身体を包み込むようにしていた。そして、自分の腕の中にいる確かな温もり……いや心地よい冷たさをかみしめていた。

自分の調子が変わる、と思ったのは夜になってからの事だった。

ぼんやりと居間でテレビを見ていたら、マルチが俺に尋ねてきた。

「あの、浩之さん夕食は何が食べたいですか？」

「うん？」

「浩之さん？」

マルチに答えなげやと思っっているんだけど、何となく頭が重い……

「ああ、夕飯ね……。そうだなあ、何でもいいや……」

「何でも……ですか？」

マルチがちよつと困ったような表情を見せる。確かにそれじゃあ答えになってないなと自分でも思うんだけど、うまくまとまらない……

「ごめん、ちよつと食欲がないんだ……」

「あ、それじゃ、スープでも作りましょうか？」

「ん……ああ、そうだね、頼むよ」

心配そうなマルチに気の利いた言葉も出やしない。そのせいもあって、

「大丈夫ですか？」

と、マルチは俺のそばから離れようとしなない。

「なあに、ちよつと疲れがたまっただけだから、心配いらないうって……」

『TOO HOT』

「浩之さん…」

マルチは今にも泣きそうな表情だ。

「ははは、そんな目で見なくても大丈夫だってば…」

でも、それを打ち消すほどの強い言葉は、俺の口から出てこないらしい。

「本当につらそうですよ…」

とマルチが言いながら、小さな手を俺の額に当てた。

そう言えばさつきも感じたけど、マルチの手が冷たくて気持ちいい。

あれ？ そう言えばマルチの体温って人間と大差ない温度に保ってるんじゃないか
った
け？

んじゃ、何で冷たいと感じるんだ？

「マルチ、お前の体温って結構低いんだなあ」

「え？ そんなはずありませんよ。普通は三十六度前後を維持してるんですけど…」

そーかそーか。

んじゃ、やっぱり低いんじゃないか……。

……何かおかしくねーか？

人間並みの体温を維持してるって？

「…じゃあ、何でお前の身体、冷たいんだ？」

「え……。それは違いますよ……」

「違う？」

俺の質問にわずかに困ったような表情をしたが、マルチはすぐに明るく答えるのだった。

『TOO HOT』

「はい、浩之さんの額がわたしの表面温度よりも高いんですよ、きつと」

そーかそーか。

俺の額が熱いつてか？

何だ、そーゆー事だったんだあ……。

「そうか、マルチはいつもと変わんないのかあ……。ははは、つまりは俺の方が熱くなつてたつて事なんだな？」

「ええ、そうですよ」

「マルチが正常でよかつたよ……」

「はい」

俺が笑うと、マルチも合わせるように笑う。

うん、よかつたな、ほんとに。

……………。

……つて、違うだろ？

……それつてつまり、俺が熱いつて事だろ？

……つて事は、あれだ。さつきから頭が重かつたり、身体がだるいなんて感じてたのは、このせいだったんだ。

やっぱり池でのんびりしてたのがまずかつたんだろうな。

……あ、駄目だ。

熱があるつて自覚した途端に、本当につらくなつて……き……た……。

急激に速のく意識。

『TOO HOT』

「浩之さん！」
マルチが叫んでいたようだったが、もう……視界が……Blackout……。

「大丈夫ですか？」

俺が目を開けると、その先にはマルチの心配そうな顔。今にも泣き出しそうな感じもするくらいだ。

「あれ……、どうなってんだ？」

俺は自分の状況が飲み込めなかった。

確か夕飯をどうするかマルチが聞いてきて、俺がなんか熱いなど思ったら、熱があった事に気がついて、そのまま意識が遠くなって……。

「ああ、そうか。倒れちゃったのか、俺……」

相変わらず頭が重いし、何だか意識もはつきりしない。

「急に寝ちゃったもんですから、びっくりしましたよ。……わたしじゃ、浩之さんをベッドまで運べないし……」

とマルチの声に気づいて、周りを確かめると、確かにそこは居間のソファの上だった。

ただ、寝かされた身体に毛布が掛けてあった事と、頭に濡れタオルが置かれているらしい。

「マルチがやってくれたのか、これ……」

「はい……、でもわたしあんまりお役に立てなくて、申し訳ありません……」

「そんな事ないよ……。こうしてマルチが出来る事をやってくれば、それでいいし、だいたいそんな事まで気を遣わなくていいんだよ……」

マルチは俺にとっては単なるメイドロボじゃない。俺が倒れたからって、何もそこまで

『TOO HOT』

自分を追い詰める必要はないじゃないかあ…。

「…浩之さん、これからどうすればいいんですか…」

心配そうに尋ねるマルチ。だけど、こんな事態の対処って、マルチはよく知らないのか？ それって、基本的な事だっけ聞いてるけどな…。

「…こんな時どうすればいいって、マルチは知らないのか？」

「…すみません、よく分からないんです…」

う、うゝゝむ…、これは困ったな…。まだ俺も立ち回りは出来そうにないし、近所の知り合いって言ったらあかりくらいだけけど、今日はいないって言ってもんなあ…。

あ……駄目だ……考え事したら、余計に熱が…。

「しっかりしてください、浩之さんっ」

マルチの叱咤するような声が聞こえる。けど、これって何か状況を間違えてないか？

「…あのなあ、別に寝たら死ぬって訳じゃないんだぜ？」

「そ、そうですね…。それじゃあ…」

「とりあえず額のタオルを冷たいのと替えてくれないかな？」

「はいっ、冷たいタオルですね？」

俺がリクエストを出すと、マルチは気合いの入った表情ですつと立ち上がりすぐに戻ってきた。

「はい、冷たいタオルです」

と、マルチが俺の額に、タオルをそつと…

いや、ガンつと冷たい何か俺の額に当たった。

『TOO HOT』

「げっ……」

よく見ると、それはちんこちに凍ったタオルだった。

「…何かいけなかつたですか？」

マルチが不安そうな表情を見せる。

…俺は一瞬何も言えずに、ただ口をパクパク動かす事しか出来なかつた。

「あの…浩之さん？」

「…マルチ、冷たいタオルってのは、凍ったタオルじゃないんだよお」

「え…凍ったのじゃ駄目だったんですか？」

「マルチいいい…」

「でも、それじゃどうやって冷やすんですか？」

…決してマルチが冗談や茶目つ気でやってる訳じゃない事は、よく分かっている。

…そう言えば、さっきマルチの身体が冷たくて気持ちいいって感じてたっけ。

ここはひとつ、マルチのためにもお願いするとするか……。

「なあマルチ…」

「はい…」

「マルチの気持ちは十分過ぎるほど分かっているからさ、マルチ自身で俺を冷やしてくれ

よ

「わたし自身ですか？」

「うん。さっきマルチに触った時、マルチの体が冷たくて気持ちよかつたんだ。だからさ、マルチの手を俺の額に当ててくれないかな？」

『TOO HOT』

…正直言って、それで俺の熱が下がるとは思ってなかった。ただ、これ以上マルチに余計な事をさせるよりも、そばにいてくれるだけの方が俺の心が落ち着くと思ってたからだ。マルチは少し恥ずかしそうにしながら、

「…それだけでいいんですか？」

と聞きながら、そっと俺の額に手を乗せてくれた。

「ん……。やっぱり気持ちいいよ、マルチの手って…。それに、こうしてマルチがそばにいてくれた方が、落ち着くんだ！」

それはお世辞ではなく本当の事で、事実マルチの手が額に乗った途端、俺は何となく安心できた。それに、本当に冷たくて柔らかくて、気持ちがいい。

「浩之さん……」

マルチの顔が赤くなっている…。

気のせいか腫もうるんのような…。

「マルチ……」

あまりの心地よさに俺はいつしか意識が薄れていく。それも、さっきのように熱で朦朧となったのではなく、本当に安らかな休息を得たと言う感じで。

…マルチ、さんきゅ……

すでに言葉にならない言葉を最後に、俺の意識は眠りへと落ちていった…。

……。

“パタッ”

……。

『TOO HOT』

.....

…俺は自分の身体に何かの「重み」を感じて目が覚めた。

どれくらい眠っていたのかは分からないが、身体の方はかなり楽になっていた。マルチのおかげだな、きつと…。

と、俺がマルチに礼を言おうと思って、自分の周りをよく見ると……。

マルチが俺の上に覆い被さっていた…。

寝てる？ いや、そんな訳がないだろ？

マルチの様子を確認しようと思い、身体を起こそうとした時。

俺の額の上には、相変わらずマルチの手が置かれていた。しかも、その手の温度は冷たい。だが、マルチが乗っている部分は明らかに熱いのだ。

頭寒足熱なんて言う事を実践してくれたのか…。どうしたらいいか分からないなんて言ってた割にはちゃんとやってくれてるじゃないか、マルチ…。

俺はゆっくり身体を起こそうとマルチの手を取る。

でも、何かおかしいような…。

そうだ、マルチの反応がない。

「…マルチ？」

そつと声を掛けてみたが、返事はない。相変わらず手は冷たいまま…で身体は熱い…熱い？ もしかして！

俺はマルチの身体をひっくり返さないようにそつと起き上がって、マルチの様子を確認した。

『TOO HOT』

すると、俺の額に当てていた手以外の部分が、かなり熱くなっているじゃないか！ 確
かマルチは汗で冷やすとか言ってたけど、それも全然出ていない。

「おい、マルチ！ しっかりしろって！」

身体を揺すってみたものの、やっぱり返事はない…。

オーバーヒートか？ にしては、今までとはちょっと状況が違うようだ…。

マルチそのものが完全に停止するようにも見えないし、手だけは明らかに冷たいのだ。
手だけ冷たい？

まさか…。

俺が「冷やしてくれ」なんて言ったから？

ずっと、手だけを冷やしてたのか？

他の部分はかなり熱くなってるのに？

ちくしょう…：…なんて事を！

俺のために一生懸命冷やしてくれたマルチの事を思ったら、俺は泣きたくなってきた。

いや、もう既に泣いてるかあ…。駄目だ、涙が止まりやしないぜ…。

ああああ、今はそんな事してる場合じゃないぜ。とにかくマルチを冷やさなきゃな。確

か長時間の過熱運転は機構部を傷めるって言ってたしな…。

でもどうやって冷やす？

水の中につけるか？

それって大丈夫なんだっけ？

…：…ええーい、悩んでいても始まらねえ！

『TOO HOT』

意を決して俺はマルチを抱き上げて、そのまま風呂場へ直行。湯船にマルチをそっと置いて、身体全体にシャワーヘッドから水を思いっきり掛ける。

これで大分違うはずだよな…マルチ、目を覚ましてくれよお。

勢いよく出た水は、マルチの身体にそって流れる。だが、一向にマルチの様子が変わらない。どうしよう…。

どうしよう…。

俺は初心者ユーザーだし、こんな時どうすればいいのかなんて、全然思いつきやしない。ああ、俺がもっと詳しくかったらなあ…。それかせめて近くに専門家でもいればいいのに…。

専門家？

そうだ！ 専門家が近くにいないか…。確かあのディスクと一緒に紙が一枚あったはずだよな…。

H M 研究所。

確かあそこがマルチのサポートをするって書いてあったよな。

そして、俺は急いで二階の部屋に戻って、例の紙切れを探し出した。それにはちゃんと電話番号と担当者の名前が書いてある。

その担当者がこの時間にいるかどうかなんて気にする余裕はない。とにかく誰でもいい、マルチを見てくれれば。

「えーっと……」

はやる心を押さえながら、電話番号を押していく。そして、呼び出し音が俺の耳に入る。

二回……三回……クソっ、早く出るよ！

『TOO HOT』

五回……誰もいないのか？

七回……まだ出ない……本当にこの番号で間違いないんだらうな？

ええい！ と俺が一度掛け直そうかと思つた時だった。

『はい、HM研究所サポートデスクです』

と、男の声が返ってきた。

やっと出た！ ちくしょう、いるならさっさと出るよな……

「あ、あの、マルチの……」

と、俺が言いかけた時、電話の相手はすぐに分かつたらしく、

『藤田さんですね。私はマルチのサポート担当の山本と言います』

と、挨拶をしてくれた。こつちを知ってるのなら話が早い。とにかく今はそんな挨拶を悠長に交わしてる場合じゃないんだから。

「あ、あのつ、マルチがですね、熱くなつてなかなか戻らないんですよ！ 今は水を当てて冷やしてるんですけど、何かやる事ってありますか？」

『オーバーヒートして、自動復帰はしてないんですね？』

電話の向こうの相手……山本さんは焦る俺とは正反対に落ち着いた声で聞き返す。そのおかげもあつてか、何だか俺も少し落ち着いたような気がする。

「はい、そう……だと思えます」

『分かりました。すぐにそちらに伺いますので、藤田さんはマルチを引き続き流水で冷やしてください』

山本さんはそれだけ言うと、挨拶もなしに電話を切ってしまった。

『TOO HOT』

しかし、素早い……。落ち着いてるように思えたけど、やっぱりあっちの人も慌ててたんだらうな、きつと。

……と、そうだ。

こんな事をする場合じゃない。俺は引き続きマルチの様子を見てなくちゃいけないんだよ。

そして、風呂場に戻ってみたが、やはりマルチの様子は変わらない……。

湯船に寝かせるようにしているマルチの身体に、水を当てながら俺は何だかマルチに申し訳なく思った。

「マルチい、ごめんな……。俺が考えなしに言ったばかりにさ、こんな目にあわせちゃって……」

だが、そんな俺の言葉にも、マルチは何も反応を示してくれなかった。俺はそんな姿が無性に悲しくてたまらなかった……。

ほどなく玄関に來客の聲がした。

さつき電話で話した山本さんが、何か色々な機材を積んだ大型のワゴン車でやって來た。人間で言うところの救急車みたいなもので、中である程度の補修が出来るのだと言う。

俺はさっそくマルチを風呂場から、外に止めてあるワゴン車へと運び出した。

そのマルチを見て、山本さんは頷きながら、

「言った通りに冷やしてくれてたんですね、ありがとう」

と、俺に礼を言った。俺としてはそんな事をされる覚えはない。ただマルチを助けたいと言う気持ちだけだったのに。

「…俺はマルチを助けてあげたいって思ってただけです」

だが、山本さんは

「うん、ありがとう…」

と、また繰り返してくれた。俺はその時ふと、マルチの魅力つてのはこんな人たちに作られたからなのかなと思った。だって、山本さんのマルチを見る目はまるで我が子を見る親のようだったから。

そして、俺がしばらく様子を見てみると、

「…冷却システムを変な風に使ったみたいですね」

ワゴン車の機材を何やら操作した後に、山本さんがそう言った。

「変って、どういう事ですか？」

『TOO HOT』

俺の質問にまじめに山本さんが答えてくれる。

「結果から見れば、体内の冷却処理をある一点に集中させてしまったという事です。だから本来は補助冷却である汗もすぐに過負荷になってる。でも、思考そのものが停止していませんよ」

「一体どうしてですか？」

「思考部分が止まると、マルチは温度が下がるまで動けませんし、当然冷却システムは本体維持を最優先にして動作しますからね」

「え？」

「マルチの意思が存在する場合、冷却システムもその意思に従うんです、藤田さん…」

「じゃ、じゃあマルチが自分でそうさせていたって事ですか？」

「そうです。しかも、その状態を長時間続けたら、マルチそのもののがかなり損傷してしまうんですよ。とりあえず今は外から強制的に冷却システムを動かしますから、なるべく近いうちに研究所に来てください。どのみち冷却システムを新しい物に替える必要がありますから」

何てこった！

マルチはやっぱ俺が言ったのを守ってたんだ…。自分の身体的事も顧みないで…。

そして、山本さんがまた操作を続けてしばらくしてから、マルチの表情が戻ってきた。

ゆっくりと目を開けるマルチ。

その開口一番。

「あ……山本さん、お久しぶりです」

『TOO HOT』

「のんきに挨拶してる場合じゃないだろうに、君は冷却システムがどれだけ重要か分かってるんだろう？」

山本さんの口調は丁寧ではあるが、確かに怒っていた。そりゃ、そうだよ。俺だって…やっぱり怒るよな。

「マルチい！ 無茶しやがって！」

と、軽くマルチの頬に手を当てると、まだ少し熱い…。

こんな俺の馬鹿みたいなお願いを本気にしやがって…。

「馬鹿だなあ…いくら俺が冷やしてくれて言ったからって…自分の身体のことを考えない奴があるかよお…」

あ、駄目だ。人がいるってのに、また涙が出てきそうな…。

「浩之さん…ごめんなさいい」

あ…、何でお前が俺に謝るんだよ、マルチ…。

「違うんだ、違うんだよ、マルチ。お前は全然悪くないんだ…」

「じゃ…じゃあ、泣かないでくださいよ…」

と言いながら、当のマルチも泣いていた。

ははっ、この馬鹿マルチ…。

応急的な処置（と言っても冷却システムの復帰と冷却水の補充、後は各部の点検だけらしいが）をすませて、山本さんが研究所に戻った後、俺とマルチはようやく落ち着きを取り戻す事が出来た。

だけど、マルチはちょっと落ち込んでるようにも見える。ずっと申し訳なきそうにして

『TOO HOT』

いるし、顔も俯いたままだ。

「なあ、マルチ……」

「…はい？」

「今度からはちゃんと自分の身体の事を気遣ってくれよ。俺の事を大切にしてくれただけ嬉しけどさ、俺は嫌だよ」

「え……」

マルチの表情が一瞬こわばる。でもな、マルチ……。

「やっぱり起きた時にマルチがいつもの笑顔で『おはようございますっ』って言ってくれないとき……」

マルチの表情が見る見るうちに変わっていく。そして、

「は、はいっ、分かりました！」

よし、いつもの笑顔だ。

やっぱりマルチはこうでなくちゃね。

さてと、これからはマルチの身体の事も俺がちゃんと見ててやらないとな…。

一人じゃ何にも出来なくて、

人の事ばかり気遣って、

いつも謝ってばかりで、

……優しくて、素敵な女の子。

それがマルチだぜ？

俺が守ってやらなけりゃ、誰がマルチを守るってんだよ。なあ、マルチ……。

俺とマルチは目を置かずして、再び山本さんに会う事になった。

目的は冷却システムの一件だ。

「今度はこの前みたいなのはありませんよ」

と自信を持って太鼓判を押す山本さんと、それに合わせるように調子のいいマルチ。

「はい、何でも今度のは前よりも冷却能力が二十パーセントも上がったんですから。もう夏でも平気です！」

そんな風に元気に言うマルチに俺は、一つだけ質問を試してみた。

「マルチ、二十パーセントアップって、実際どれくらいの違いなのか分かってるのか？」
すると、マルチは困ったような表情をして、

「え……実はよく分からないんです」と答えた。

ま、そんなもんだらうなと思っていただけ。

「それじゃ、ちょっと試してみるか？」

「え？」

俺はきよとんとするマルチの顔に、自分の顔を近づけて……唇に触れる程度の軽いキスをした。

近くに山本さんもいる研究所のロビーで、だ。

『TOO HOT』

「それでも平気か？」

これだけの事をやっても平気だったら、どこでも大丈夫だろう。そう思っていた。だが、

「……………」

マルチの反応がない。

「おい、マルチ？」

「……………」

「あの…」

反応しなくなったマルチの代わりに、ぼりぼりと頭を搔きながら山本さんが俺に向かって喋り出した。

「マルチ…すでに止まってますよ……」

「へ？」

「さすがに刺激が強すぎたみたいですね……」

山本さんは気恥ずかしそうに説明してくれる。

いやいや、そんな事言われる方がよっぽど恥ずかしいんだよ。だいたいだなマルチ、お前がこんなに簡単に止まっちゃうなんて……。

「これじゃあ、先が思いやられますね……」

と冷静ながら、どこか笑いをこらえている様子の山本さん。

俺は……

「マルチいいいい！」

と、動かなくなったマルチの身体を抱きしめて、ただ叫ぶばかりだった…。

『TOO HOT』

ほんとにこの先が…心配だぜ……。
でも……

ま、いいか！

これがマルチだもんな。

俺の……マルチ、だもんな……。

End.

『TOO HOT』

『TOO HOT』

初版:1997/06/03

(一部修正):1997/06/04

第二版(エピソード追加、他修正):1997/06/10

第三版(改題及びPDF化):1998/07/30

(PDF書式変更):1999/11/06

PDF書式変更:2016/05/08